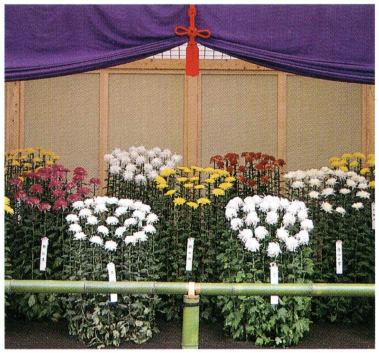


えどぎくかだん
江戸菊花壇

江戸菊は、江戸時代に江戸(東京)で発達した古典菊です。
花が咲いてから花びらが様々に変化し、色彩に富んでいるのが特徴で、「花の変化」を鑑賞する菊です。
新宿御苑の菊花壇のなかでは、もっとも古い歴史があります。

作り始め：明治11年(1878)

いちもんじぎく、くだものぎくかだん
一文字菊、管物菊花壇

一文字菊は、花びらの数が16枚前後の一重咲きの大輪菊です。花の形から、御紋章菊ともよばれています。
管物菊は、筒状に伸びた花びらが放射状に咲く大輪菊で、糸菊ともよばれています。

作り始め：大正14年(1925)

ひごぎくかだん
肥後菊花壇

肥後菊は、古くから肥後(熊本)地方で作られた一重咲きの古典菊で、おもに武士の精神修養として発達しました。
栽培方法や飾り方は、江戸時代に熊本で確立した、秀島流の厳格な様式にもとづいています。

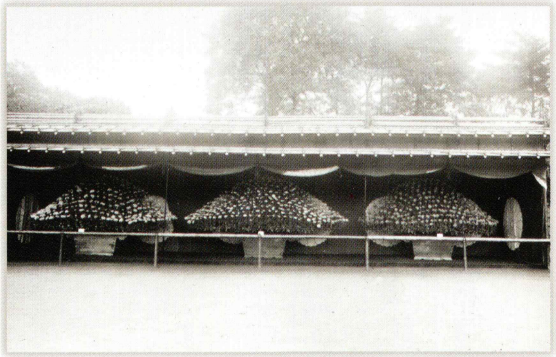
作り始め：昭和５年(1930)

おおぎくかだん
大菊花壇

大菊は、菊の代表的な品種で、花びらが花の中央を包み込むように丸く咲くのが特徴です。
神馬の手綱模様に見立てた「手綱植え」とよばれる新宿御苑独自の様式で、39品種311株の大菊を黄・白・紅の順に植えつけ、全体の花が揃って咲く美しさを鑑賞する花壇です。

作り始め：明治17年(1884)

皇室ゆかりの伝統を受け継ぐ
新宿御苑の菊花壇



日本に園芸品種の菊が渡来したのは、奈良時代末から平安時代はじめといわれています。その後、室町、江戸時代と発達をとげ、明治元年(1868)に菊が皇室の紋章に定められました。

明治11年(1878)、宮内省は皇室を中心として菊を鑑賞する初めての『菊花拝観』を赤坂の仮皇居で催しました。展示用の菊は、当初は赤坂離宮内で栽培されていましたが、明治37年(1904)より新宿御苑でも菊の栽培が始まりました。そして昭和4年(1929)からは、観菊会も御苑で行われるようになりました。

大正から昭和にかけては、観菊会の展示の規模、技術、デザインなどがもっとも充実した時期で、これらによって新宿御苑はパレスガーデンとして、広く海外に知られるようになりました。

菊花壇展のご案内

公 開 日　11月1日～15日
・公開期間中は、特別開園期間として月曜日も休まず開園します。

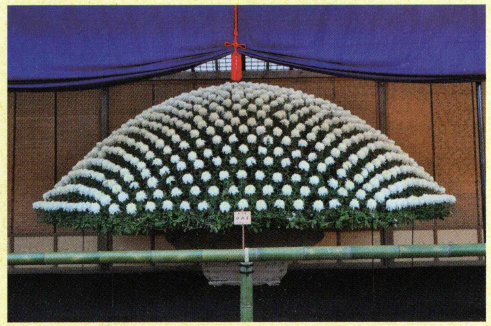
公開時間　9：00～16：00

新宿御苑　サービスセンター
〒160-0014　東京都新宿区内藤町11
TEL 03(3350)0151　FAX 03(3350)1372
http://www.fng.or.jp/shinjuku-index.html
http://www.env.go.jp/garden/shinjukugyoen/

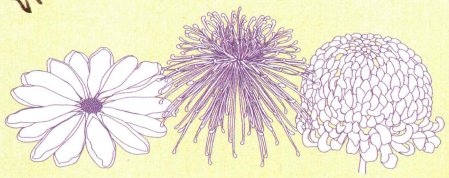
発行：環境省新宿御苑管理事務所

新宿御苑
菊花壇展

皇室ゆかりの伝統を受け継ぐ



清新優美のあでやかさ



特色あふれる菊

懸崖作り花壇（けんがいづくりかだん）

野菊が断崖の岩間から垂れ下がって咲いている姿を模して、１本の小菊を大きな株に仕立てる技法を「懸崖作り」とよびます。

古木の台の上に、花鉢を配色よくならべています。

作り始め：大正４年(1915)

伊勢菊（いせぎく）、丁子菊（ちょうじぎく）、嵯峨菊花壇（さがぎくかだん）

伊勢菊は、伊勢地方(三重県松阪)で発達した菊で、縮れた花びらが垂れ下がって咲きます。

丁子菊は、花の中心部が盛り上がって咲く菊で、アネモネ咲きともよばれています。

嵯峨菊は、京都の嵯峨地方(京都・嵯峨野)で発達した菊で、細長い花びらがまっすぐに立ち上がって咲きます。

作り始め：昭和30年(1955)

大作り花壇（おおづくりかだん）

初冬に出てくる芽を１年がかりで枝数をふやし、１株から数百輪の花を半円形に整然と仕立てて咲かせる技法を「大作り」とよびます。

これは新宿御苑独自の様式で、全国各地の菊花壇展でみられる千輪作りの先駆けにもなっています。

作り始め：明治17年(1884)

新宿御苑の菊花壇は、回遊式の日本庭園内に上家(うわや)といわれる建物を設け、特色あふれる花々を独自の様式を基調に飾りつけた花壇です。

それぞれの花壇は、順路に沿ってご覧いただくと、最も美しく鑑賞できるようにデザインされています。

菊花壇展会場へは、日本庭園の**中央入口**よりお入り下さい。

H30(2018)11.11(月)白門四一会「菊を観る」にて